

東濃農林事務所の普及活動状況

令和8年2月

安心して身近な「ぎふの食」づくり

■水稲（酔むすび） 第4回新酒米による産地づくり研究会

2月19日、多治見市のバロー文化ホールで第4回新酒米による産地づくり研究会が開催され、東濃・恵那管内の水稲生産者18名、酒造組合関係者12名等、68名が出席した。

現在、生産者と酒蔵が連携し、中山間地向けの新酒米品種「酔むすび」による新しいブランドの展開を進めている。取組2年目となる本年度は、初年度の課題を踏まえた栽培及び醸造の改良に取り組んだ。

栽培では、課題であった単収の確保と斑点米カメムシ類の防除に重点を置いた。適期の防除の徹底によりカメムシ被害は抑制されたものの、一部ほ場でイノシシによる獣害が発生し、単収は平年並みであった。また、収穫時期の遅延による胴割れ米が発生し、等級が低下した。次作に向けて、獣害対策と適期刈取の徹底を指導していく。

研究会では、中山間農業研究所中津川支所より移植時期、肥料及び栽植密度の試験研究結果が発表され、農業普及課からは現地の栽培結果及び次年度の計画を説明した。また、食品化学研究所から醸造試験の結果が発表された。酒蔵からは、「酔むすび」特有のすっきりとしたキレのある味わいが高く評価された。海外バイヤーから「酔むすび」の買い付け要望が入るなど、注目を浴びつつある。

酒蔵からは、令和8年度も本年度と同規模の出荷要請があり、東濃管内では6戸、5.9haの作付けを計画している。

今後も、「酔むすび」の栽培技術指導を通して、酒蔵と連携したブランドづくりを支援していく。



【研究会の様子】



【「酔むすび」を使用した
日本酒】